

# 公演日程

## A program

第1565回 NHKホール  
4/8 [土] 開演 6:00pm  
4/9 [日] 開演 3:00pm

The 1565th Subscription Concert  
on 8th (Sat.) & 9th (Sun.) April  
at 6:00 (Sat.) 3:00pm (Sun.) in the NHK Hall

指揮 シャルル・デュトワ  
マルガレーテ ルクサンドラ・ドノーゼ(メゾ・ソプラノ)  
ファウスト ジャン・ピエール・フルラン(テノール)  
メフィストフェレス サー・ウィラード・ホワイト(バス・バリトン)  
ブランダー 佐藤泰弘(バス)  
ソプラノ 天羽明恵  
合唱 二期会合唱団、東京少年少女合唱隊  
合唱指揮 佐藤 宏、長谷川冴子  
コンサートマスター 篠崎史紀

Charles Dutoit conductor  
Marguerite Ruxandra Donose mezzo soprano  
Faust Jean-Pierr Furlan tenor  
Méphistophélès Sir Willard White bass-baritone  
Brander SATO, Yasuhiro bass  
AMOU, Akie soprano  
Nikikai Chorus Group, The Little Singers of Tokyo, chorus  
SATO, Hiroshi, HASEGAWA, Saeko chorus master  
SHINOZAKI, Fuminori concertmaster

～ N響創立80周年記念 ～

～NSO 80th Anniversary Concert～

ベルリオーズ／劇的物語「ファウストのごう罰」作品24  
(120')

Hector Berlioz (1803-69)  
"La damnation de Faust", légende dramatique op.24

## B program

第1567回 サントリーホール  
4/19 [水] 開演7:00pm  
4/20 [木] 開演7:00pm

The 1567th Subscription Concert  
on 19th (Wed.) & 20th (Thu.) April  
at 7:00pm in the Suntory Hall

指揮 シャルル・デュトワ  
ヴァイオリン リサ・バティアシュヴィリ  
コンサートマスター 堀 正文

Charles Dutoit conductor  
Lisa Batiashvili violin  
HORI, Masafumi concertmaster

シベリウス／交響詩「フィンランディア」作品26 (8')

Jean Sibelius (1865-1957)  
"Finlandia", tone poem op.26

ベートーヴェン／ヴァイオリン協奏曲 二長調 作品61 (43')

Ludwig van Beethoven (1770-1827)  
Violin Concerto D major op.61

休憩

Intermission

シベリウス／交響曲 第1番 小短調 作品39 (38')

Jean Sibelius Symphony No.1 e minor op.39

## C program

第1566回 NHKホール  
4/14 [金] 開演 7:00pm  
4/15 [土] 開演3:00pm

The 1566th Subscription Concert  
on 14th (Fri.) & 15th (Sat.) April  
at 7:00pm (Fri.) 3:00 pm (Sat.) in the NHK Hall

指揮 シャルル・デュトワ  
ピアノ ピョートル・アンドルジェフスキ\*  
コンサートマスター 堀 正文

Charles Dutoit conductor  
Piotr Anderszewski piano\*  
HORI, Masafumi concertmaster

ラヴェル／スペイン狂詩曲 (15')

Maurice Ravel (1875-1937) Rapsodie espagnole

モーツァルト／ピアノ協奏曲 第20番 二短調 K.466\*(30')

Wolfgang Amadeus Mozart (1756-91)  
Piano Concerto No.20 d minor K.466\*

休憩

Intermission

シマノフスキ／交響曲第4番(協奏交響曲)作品60\*(25')

Karol Szymanowski (1882-1937)  
Symphony No.4 (Symphonie concertante) op.60\*

ラヴェル／バレエ音楽「ラ・ヴァルス」(12')

Maurice Ravel "La valse", ballet



指揮 conductor  
**シャルル・デュトワ**  
Charles Dutoit

1980年にフィラデルフィア管弦楽団を指揮してアメリカ・デビュー以来、毎シーズン、アメリカに招かれ、ボストン交響楽団、ニューヨーク・フィルハーモニック、シカゴ交響楽団など米主要オーケストラを指揮。またベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、ロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団、ロンドンの主要オーケストラ等、世界の主要オーケストラを指揮している。77年から2002年までの25年間芸術監督をつとめたモントリオール交響楽団との活動は、ダイナミックなパートナーシップとして称えられている。90年以来ニューヨークで開催されるフィラデルフィア管弦楽団の夏季音楽祭で芸術監督と首席指揮者をつとめるほか、91年から2001年にかけてフランス国立管弦楽団の音楽監督を兼務。

オペラにおいても、20代前半に、カラヤンの招きによってウィーン国立歌劇場を指揮して以来、メトロポリタン歌劇場など世界の主要歌劇場で定期的に指揮。

88年フランス政府から芸術文化勲章のオフィシエ(勲4等)を、96年同コマンドール(勲3等)を授与。91年にはフィラデルフィア市の名誉市民となり、95年にはケベック州政府からケベック勲章のグラントフィシエ(勲2等)を贈られた。カナダ芸術連盟から2度の表彰を受け、88年、カナダ最高の功労勲章でありエリザベス皇太后も受章したカナダ勲章の名誉オフィサー章が与えられた。

96年N響常任指揮者に。98年には音楽監督、2004年9月から名誉音楽監督に就任。

現在スイス、パリ、モントリオール、ブエノスアイレスなどに居を構え、宮崎国際音楽祭と中国・広東国際夏季音楽アカデミー音楽監督もつとめる。

(小倉多美子)

[マルガレーテ Marguerite]

メゾ・ソプラノ mezzo soprano

**ルクサンドラ・ドノーゼ**

Ruxandra Donose



ルーマニア出身のドノーゼは、ヨーロッパやアメリカで広く知られているメゾ・ソプラノである。知的なアプローチと独特のスラヴの音楽性を持ち、その完成された音楽は高い水準を維持している。

ドノーゼのキャリアは1990年ミュンヘンでのARD国際声楽コンクール優勝でスタートした。92年にウィーン国立歌劇場にヤナーチェク《カーチャ・カバノヴァー》のヴァルバラ役でデビュー、それからというものウィーン国立歌劇場とウィーン・フォルクスオーパーには頻繁に出演を果たした。《セビリアの理髪師》のロジーナ、《フィガロの結婚》のケルビーノ、《コシ・ファン・トゥッテ》のドラベルラ、そして《カルメン》のタイトル・ロールに至るまで、レパートリーは幅広い。

さらにザルツブルク音楽祭でアバド指揮の《ボリス・ゴドノフ》に出演、ベルリン・ドイツ・オペラやフィンランド国立歌劇場、ドレスデン国立歌劇場、フェニー

チェ歌劇場などヨーロッパの主要なオペラハウスにデビューし、またアメリカにおいてもサンフランシスコ歌劇場を皮切りに、メトロポリタン歌劇場、ピッツバーグ歌劇場、シンシナティ歌劇場等に出演、日本では小澤征爾指揮サイトウ・キネン・オーケストラでのケルビーナが初お目見えであった。

オペラ以外での活動も積極的で、サヴァリッシュ指揮クレーヴランド管弦楽団とバッハ《マニフィカト》を、シノーポリ指揮のドレスデン・シュターツカペレとはドヴォルザークの《悲しみの聖母》を、ヤンソンス指揮ピッツバーグ管弦楽団とはモーツァルト《レクイエム》を、そしてドホナーニ指揮パリ管弦楽団とはこの《ファウストのごう罰》で共演しているが、常にその動向が注目される存在である。ウィーン在住。

(真嶋雄大)

[ファウスト Faust]

テノール tenor

**ジャン・ピエール・フルラン**

Jean-Pierr Furlan



ジャン・ピエール・フルランはフランスのテノール歌手で、トゥールーズ音楽院とパリのエコール・ノルマル音楽院で最初はトランペットを学び、数々の賞に輝いた。1985年に声楽を学び始めるとたちまちのうちに頭角を現し、フランス軍楽合唱団に入団、ソリストとしての地位を確立した。

オペラ・デビューは1992/93年のシーズン、パリのサル・ガヴォーでの《ホフマン物語》のタイトル・ロールで、このシーズンの公演が録音されるほどの好評を博す。翌シーズンもライン歌劇場（ストラスブル）の《リゴレット》マントヴァ公爵役をはじめ、同劇場《ルチア》のエドガルド、アヴィニオン歌劇場《ファウストのごう罰》のファウスト、マルメ歌劇場の新演出による《蝶々夫人》ピンカートン等、次々と主要な役を歌っている。

さらにフェニーチェ歌劇場（ヴェネツィア）、スカラ座（ミラノ）、カナディアン・オペラ・

カンパニー（トロント）、フィラデルフィア・オペラ・カンパニー、ボストン・リリック・オペラなどへデビューを果たし、またドイツにおいては《ホフマン物語》でベルリン国立歌劇場とハンブルク歌劇場に登場した。

近年はミシェル・プラッソン指揮ベルリーズ《レクイエム》、パリ管弦楽団とのベートーヴェン《第9》、リール国立管弦楽団とのブッチェニ《グローリア》、アンティーブでのドヴォルザーク《レクイエム》、モンテカルロ・フィルハーモニー管弦楽団との《ファウストのごう罰》など、コンサートでも多くの聴衆の支持を集めている。

煌びやかな美声と堅実なテクニックで着実にキャリアを築きつつあるフルランは、次代を担うテノールとして各方面から大いに期待されている逸材である。

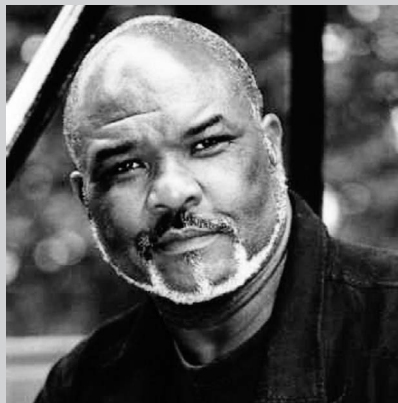
**(真嶋雄大)**

[メフィストフェレス Méphistophélès]

バス・バリトン bass-baritone

## サー・ウィラード・ホワイト

Sir Willard White



スケールの大きさ・豊かで艶やかな声、そしてステージでの圧倒的な存在感を有するホワイトは、世界的なバス・バリトンとして知られている。

ホワイトは1946年10月10日、ジャマイカで生まれた。ジャマイカの音楽学校に通った後、ジュリアード音楽院に学び、1974年にはニューヨーク・シティ・オペラ《ボエム》の 콜リーネ 役でセンセーショナルなデビューを果たした。さらにイングリッシュ・ナショナル・オペラのモンテヴェルディ《ポッペアの戴冠》のセネカ役で聴衆の絶大な支持を得た他、その後のグラインドボーン祝祭オペラでのプロコフィエフ《三つのオレンジへの恋》トゥレーフ王役も高く評価された。

これまでにイギリスを主な拠点としながら、サンフランシスコ、ロサンゼルス、そしてヨーロッパの主要なオペラ劇場で活動し、ザルツブルクやグラインドボーン、エクサンプロヴァンスなど音楽祭への出

演も数多い。またヘンデル、モーツァルト、ロッシニ、ヴェルディ、プッチーニ、ワーグナー、ドビュッシー、ショスタコーヴィチ、ムソルグスキー、そしてガーシュウィンなどを中心とした幅広いレパートリーと、ドラマティックで説得力のある役作りで、他とは一線を画している。

1986年グラインドボーン祝祭オペラでのガーシュウィン《ボーギーとバス》において、俳優としてもその実力を認められたホワイトは、ロイヤル・シェイクスピア劇団主宰公演《オテロ》で主役を演じ、各方面から絶賛された。加えてホワイトの傑出した役どころは今回の演目である《ファウストのごう罰》のメフィストフェレス、その哲学的にして悪魔的な表現はまさに絶品、これまでの業績に対して爵位が授与されている。

(真嶋雄大)

[ブランダー Brander]

バス bass

**佐藤泰弘**

SATO, Yasuhiro



新潟県長岡市に生まれる。東京藝術大学音楽科卒業、同大学院修士課程および博士課程修了。《ボリス・ゴドノフ》の研究により、同大学から博士号を授与された。1996年モスクワ音楽院研究生修了。平成9年度文化庁芸術家在外研修員としてイタリアに留学、90年第21回イタリア声楽コンクール金賞、第25回新潟県音楽コンクール大賞、98年オルヴィエート市国際コンクール第2位(1位なし)、99年第5回シモナート国際コンクール第2位、2000年第5回 ヴィッスイ・ダルテ国際コンクール第3位受賞など、国内外のコンクールで顕著な成績を取めた。2002年ヴィオッティ音楽学校修了。2003年にはロシア声楽作品に対する演奏が評価され、ロシア歌曲研究会主催の第3回ロシア歌曲賞を受賞している。

デビューは89年の芸大オペラ《フィガロの結婚》タイトル・ロール、以降幅広いオペラのレパートリーで広く支持を集

め、ベートーヴェン《第9》、ヘンデル《救世主》、またモーツァルトやデュリュフレ、ヴェルディやフォーレの《レクイエム》などのソリストとしての評価も高い。イタリア、モスクワなど国際的にも活動、2002年にはミラノのカルカノ劇場で《セビリアの理髪師》バジリーオを歌って絶賛され、新国立劇場新制作の2001年《ラインの黄金》と2003年《ジークフリート》にも出演、ワーグナーへの深い共感を示した。

2003年二期会とケルン歌劇場共同制作《ばらの騎士》では演出家クレマーから絶大な信頼を得、また2004年藤原歌劇団《アルジェのイタリア女》でA.バルツァと共演するなど、イタリアと日本を拠点に精力的な演奏活動を続けている。現在ミラノ在住、東邦音楽大学大学院教授、二期会会員。

(真嶋雄大)

ソプラノ soprano

**天羽明恵**

AMOU, Akie



東京都生まれ。東京藝術大学卒業。オペラ研修所、二期会オペラ・スタジオ修了。文化庁派遣芸術家在外研修員としてシュトゥットガルト音楽大学に留学。

1995年第6回五島記念文化賞オペラ新人賞受賞。副賞として財団助成によりベルリンで2年間研鑽を積んだ。世界的に注目を集めたのは同年のラインスベルク音楽祭、ティーレマン指揮の《ナクソス島のアリアドネ》でのツェルビネッタ役、さらにソニア・ノルウェー女王記念第3回国際音楽コンクールに優勝してその名を不動のものにした。その後ドイツを足場としながらヨーロッパ各地のオペラハウスや音楽祭に客演、トン・コープマン、グスタフ・クーン、アルベルト・ゼッダらの指揮者のもと、《リゴレット》のジルダ、《ファルスタッフ》のナネッタ、《ドン・パスクワレ》のノリーナ、《ランスへの旅》のコリンナなど多くのオペラに出演した。

2000年にはモーツァルト《後宮からの

誘かい》プロントヒェンでジュネーヴ大劇場にデビュー、バレンボイム指揮ベルリン国立歌劇場の《ジークフリート》や、サヴァリッシュ指揮N響によるメンデルスゾーンのアラトリオ《エリア》など、ヨーロッパや国内で次々と重要な役を務める他、ヴァンシャーマン指揮ドイツ・バッハゾリステンのバッハ《クリスマス・アラトリオ》のソリストや東京オペラシティ「B→C」シリーズなどでも高い評価を得ている。先頃初演された一柳慧のオペラ《愛の白夜》での主人公の妻雪子役での好演も記憶に新しい。

超絶技巧的なコロラトゥーラとリリックな声を併せ持つと言われている、今最も期待されるソプラノ歌手の1人で、1999年度アリオン賞、2003年第14回新日鉄音楽賞フレッシュアーティスト賞をそれぞれ受賞。これまで戸田敏子、フランシス・シマールの各氏に師事。

(真嶋雄大)

合唱 chorus

**二期会合唱団**

Nikikai Chorus Group



二期会合唱団は二期会創立(1952年)の翌年、53年に結成された日本の最初のプロのオペラ合唱団。二期会の《マルタ》公演の際に結成され、オペラ公演を中心に、国内の主要オーケストラとの共演など多岐にわたる活動を行っている。

N響とは55年9月定期公演以来、現在に至るまで数多く共演。近年では、デュトロ指揮のオネゲル《火刑台上のジャンヌ・ダルク》(96年12月定期公演)、アシュケナージ指揮のショスタコーヴィチ《交響曲第13番「バービ・ヤール」》(2000年10月定期公演)、サヴァリッシュ指揮のシューベルト《ミサ曲第5番》(2002年10月定期公演)、準・メルクル指揮のマーラー《交響曲第2番「復活」》(2003年10月定期公演)などで共演し、いずれも高い評価をあげている。アシュケナージ指揮のモーツァルト《レクイエム》(2005年1月定期公演)や昨年末の《第9》での名演が記憶にあたりしい。

合唱 chorus

**東京少年少女合唱隊**

The Little Singers of Tokyo



まだ敗戦の傷跡が残る1951年、当時中学校の音楽教師だった長谷川新一氏が「ルネサンスの楽曲を日本の子どもたちにも」という主旨を抱き、ヨーロッパ古典宗教曲に造詣が深く都内でグレゴリオ聖歌の講習会を行っていた故ポーロ・アヌイ神父諸氏の協力を得、都内の小学校から募集した少年たちによって結成されたのが「東京少年合唱隊」。そして、64年第1回北米親善旅行の際、東京少女合唱隊(60年結成)が加わり、現在の「東京少年少女合唱隊」となる。55年にプエリ・カントレス(世界児童合唱連盟)に日本支部として加盟。世界各国の由緒ある児童合唱団との交流を通して、当時最新の指導理論や技術を吸収。90年にはEBU(ヨーロッパ放送連合)主催国際合唱コンクール児童合唱部門で第1位を得ている。64年の北米旅行では、カーネギーホールの特約として招聘されており、また、当時の人気番組「エド・サリバン・ショー」にも出

演した数少ない日本の演奏団体でもある。97年パリの秋フェスティバル、2000年ルツェルン国際音楽祭など、各国主要音楽祭への出演も多い。

レパートリーはグレゴリオ聖歌から現代曲まで幅広く、日本の現代の作曲家への委嘱・編曲作品も数多い。

構成は、東京とその近郊の小中学校に通う6~14歳の少年少女で、それよりも年長の卒隊生によるシニア&ユース・コア(混声)も隊に属し、多彩な演奏活動を行っている。年2回の定期演奏会の他、世界各国の少年・少女合唱団との「手をつなごうコンサート」や、ミラノ・スカラ座、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、ウィーン国立歌劇場など、オペラ公演への共演も多い。N響創立75周年公演サヴァリッシュ指揮メンデルスゾーン《エアリア》でのN響との共演も好演だった。

創立50周年を機に正指揮者に長谷川冴子、常任指揮者に長谷川久恵が就任。

ヴァイオリン violin

**リサ・バティアシュヴィリ**

Lisa Batiashvili



リサ・バティアシュヴィリは2004年1月に来演、デュトワ指揮のもとシベリウスのヴァイオリン協奏曲に秀演を聴かせた。が、それを聴けず、彼女の真価をまだ知らぬ人が多いのも事実である。

しかし、今から4年半ほど前の2001年9月、アルフレート・ブレンデルが、新聞紙上でこう嘆賞したと聞けば、音楽ファンなら誰しも耳をそば立てることだろうー。

『あらゆる音符が歌い、かつ語っていた…… 偉大なヴァイオリニストは早くから己れの何たるかを明らかにする、という真理を、あらためて証明するかのように』

ピアノ界の名匠はかねがねお世辞とは縁のない人だけに、この讃辞には千鈞の重みがある。そのことを裏づけて、2004/5年のシーズンにマゼール指揮ロンドン交響楽団、同じくマゼール指揮ニューヨーク・フィルハーモニック、ヴァンスカ指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団と共演を果たしたバティアシュヴィリは、2005/6

年のシーズンにはザルツブルク音楽祭出演のほか、ロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団、サン・フランシスコ交響楽団、ロサンゼルス・フィルハーモニック、シカゴ交響楽団、クリーヴランド管弦楽団、パリ管弦楽団そしてNHK交響楽団と、文字どおり休むいとまもない共演スケジュールを組んできている。

1995年に僅か16歳でシベリウス国際コンクール(ヘルシンキ)に出場し第2位を得た彼女は、2001年、BBCプロムナード・コンサートに出演、「年間の最もすばらしい新人」に選ばれてのち、諸大陸をめぐる順風満帆の演奏活動に入った。

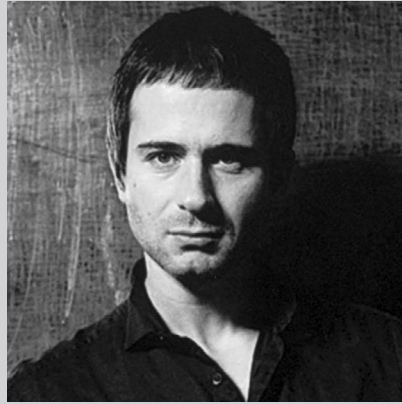
1994年以来ミュンヘンを本拠とするリサは、名オーボエ奏者のフランソワ・ルーと結婚しており、共演する折もある。なお、彼女の愛器1709年製のストラディヴァリウス「エンゲルマン」は日本音楽財団から貸与されている。

(濱田滋郎)

ピアノ piano

**ピョートル・アンデルジェフスキ**

Piotr Anderszewski



N響には初登場となるピョートル・アンデルジェフスキは、近年にわかに注目を集めている気鋭のピアニストである。1969年4月4日、ポーランド人とハンガリー人の両親を持ってワルシャワに生まれた。プロではなかったものの両親は音楽教育に熱心で、姉にヴァイオリンを、アンデルジェフスキには6歳からピアノを習わせた。リヨン音楽院、南カリフォルニア大学、ワルシャワのショパン・アカデミーなどに学ぶなかで、いちばん影響を受けたのはコルトーの弟子でもあったストラスブル音楽院のエレン・ボスキンだったという。

1990年リーズ国際ピアノ・コンクールで好成績を残しながら本選出場を辞退。その理由は「自分が楽しめなかったから」。そのエピソードも十分巷間を賑わせたが、およそ1年後、ロンドンのウイグモア・ホールでのリサイタルは、アンデルジェフスキの名を国際的に知らしめる圧倒的なコンサートとして今も語り草になっ

ている。

以降リサイタルやオーケストラとの共演、世界各地の音楽祭への出演など積極的な活動を展開しているが、ヴィクトリア・ムローヴァ（ヴァイオリン）との室内楽などで類稀なアンサンブルを構築するだけでなく、作曲や指揮などピアノのみに留まらない多彩な視野も持ち合わせている。レパートリーは幅広く、特にバッハ、ベートーヴェンなどに著しい進境を示しているが、最近ではシマノフスキを収録したCDが高く評価され、また弾き振りで全曲録音を目指すモーツァルトのピアノ協奏曲「第17番K. 453」と「第20番K. 466」がCDリリースされたばかり。

1994年の初来日以来大の日本虜。相撲や歌舞伎など伝統芸能ばかりではなく、「和食は世界一」と目を輝かせる。

(真嶋雄大)

ベルリオーズ Berlioz

## 劇的物語《ファウストのごう罰》作品24

ベルリオーズ(1803-69)がはじめてジェラルド・ド・ネルヴァルの翻訳によるゲーテの『ファウスト』に接したのは青年期であろうと推測されている。ローマ賞への応募を繰り返していたベルリオーズが1828年に書き上げ、記念すべき作品1となったのは《ファウストの8つの情景》と称する小品集であった(個々の曲の題名は14ページの一覧表を参照のこと)。

この作品は一部を除き演奏される機会にも恵まれなかった。その後1845～46年にかけての演奏旅行で訪れたハンガリーで、同地の行進曲を取り入れた《ハンガリー行進曲》が大好評をもって迎えられる。この暖かい反応、そしてハンガリーの大地に魅せられたベルリオーズは、ファウストを原作には登場しないこの平原に連れてきて、劇的な作品を書こうと思い立ったのである。

新しい作品は、10年以上前に作曲された作品1を取り込みながら、『ファウスト』の中の主要なエピソードを追加していくように構成されている。このためにできあがった作品は、純粋なオペラでもなく、また《ロメオとジュリエット》のようにどちらかと言えば交響曲・器楽曲的な体裁をとるものでもなく、全く新しい「舞台上で上演されるオペラ」のようなもの

となった。ワーグナーが理想とした「交響的なもの」と「ドラマ的なもの」をあわせもった新たな作品が多く生まれる19世紀において、ベルリオーズの《ファウストのごう罰》こそ、その理想を実際に体現した作品でもあった。

全体は4部から構成される(14ページの一覧表を参照)。基本的には原作の枠組み通りに進行するが、ベルリオーズによって差し挟まれたオリジナル部分もある。

(以下は主要な箇所を抜粋)

**1 ハンガリーの草原:** 本来自分の書齋にいるべきファウストを、ベルリオーズはハンガリーの草原へと連れ出した。第1部は自分を暖かく迎え入れてくれたハンガリーへのオマージュでもあろう。

**3 ハンガリー行進曲:** コンサートで独立して演奏されることも多い名曲。

**5 復活祭の歌・メフィストフェレスの登場:** ファウストに生の喜びを教えるべく外へと連れ出す。

**7 ブランダーの歌:** ライブツィヒのアウエルバッハ酒場。ブランダーが「ネズミの歌」を歌い、酔客たちはフーガでこれに答える。

**9 メフィストフェレスの歌:** いわゆる

「蚤の歌」。弦楽器のピチカート(指で弦を弾く)と跳躍音型が、蚤のはね回る様子を描く。

**11 地中の精と大気の精の合唱:**メフィストフェレスはファウストに、夢の中で美しい少女の姿を見せる。

**15 ファウストのアリア:**魔法の力で青年の姿になったファウスト。まだ見ぬ少女へのあこがれを歌う。

**16 トウレの王:**マルガレーテの登場。ヴァイオリンを欠く弦楽器の書法が特徴的。

**17 降霊:**メフィストフェレスは鬼火(フルート、ピッコロ、オーボエの走句)を呼び寄せ、妖しげなセレナーデでマルガレーテを惑わせる。

**20 トリオと合唱:**愛情を確認し合うファウストとマルガレーテ。ファウスト役には3点嬰ハ音が2回ある。

**21 ロマンズ(マルガレーテ):**ファウストを思う切ない歌。いわゆる「グレートヒェンの紡ぎ歌」。

**23 レチタティーヴと狩:**メフィストフェレスは、マルガレーテが母殺しの罪で処刑されることを伝える。マルガレーテはファウストを待つために母親に眠り薬を飲ませていた。マルガレーテを救うため、我が身をメフィストフェレスへと

売り渡す契約書にサインするファウスト。

**24 地獄への騎行:**地獄へ向かって馬を走らせる(ヴァイオリン)3人だが、すでに手遅れ。マルガレーテも、そしてファウスト自身も地獄へ落ちる。勝利の雄叫びを上げるメフィストフェレス。

**26 マルガレーテの昇天:**だが、清純な魂の持ち主マルガレーテは天国で許しが得られ、天国へと招き入れられる。

**作曲年代:**1845~46年

**初演:**1846年12月6日、パリのオペラ・コミック。作曲家自身の指揮で

**楽器編成:**フルート3(ピッコロ3)、オーボエ2(イングリッシュ・ホルン2)、クラリネット2、バス・クラリネット1、ファゴット4、ホルン4+バンド2、トランペット2+バンド2、ホルネット2、トロンボーン3、テューバ2、ティンパニ2、大太鼓・シンバル、タンブリン、トライアングル、タムタム、グロックンシュピール、ハープ2、弦楽、メゾ・ソプラノ1、テノール1、バス・バリトン1、バス1、ソプラノ1、混声合唱

(広瀬大介)

# 《ファウストのごう罰》

## 全体構成 [部・場] とテキストの作者

作成・川口義晴

		scène (場)	partie (部)	8 scènes (8つの情景)	auteur (作者)
1	ハンガリーの草原	1	I		G
2	農夫たちのロンド	2		*	N
3	平原のもう一方のある場所	3			B
4	北ドイツ	4	II		G
5	復活祭の歌	4		*	N
6	酔っぱらいたちの合唱	6			G
7	ブランダーの歌	6		*	N
8	ブランダーの歌のテーマによるフーガ	6			B
9	メフィストフェレスの歌	6		*	N
10	メフィストフェレスののアリア	7			B
11	地中の精と大気 of 精の合唱	7			N
12	大気 of 精霊たちのパレエ	7		*	B
13	兵士たちの合唱、学生たちの歌	8			B
14	小太鼓とラッパが兵士たちに帰営を告げる	9	III		B
15	ファウストのアリア	9			B
16	トゥーレの王	11		*	N
17	降霊	12			B
18	妖精たちのメヌエット	12			B
19	メフィストフェレスのセレナーデ	12		*	N
20	トリオと合唱	14			B
21	ロマンス(マルガレーテ)	15	IV	*	N
22	自然への祈り	16			B
23	レチタティーヴと狩	17			B
24	地獄への騎行	18			B
25	地獄の首都	19			B
26	マルガレーテの昇天	19			B

\*は《ファウストの8つの情景》の流用曲

Gはガンドニエール (Almir Gandonière)

Nはネルヴァル (Gérard de Nerval)

Bはベルリオーズ (Hector Berlioz)

## シベリウス Sibelius フィンランディア 作品26

19世紀初頭、フィンランドは自治大公国として、スウェーデンから帝政ロシアの支配下におかれることになる。当初、ロシアは大公国に大幅な自治権を認めていたが、19世紀末に至ると、民衆から言論等の自由を次々に奪っていった。そうした厳しい圧政の中、フィンランドでは民族意識が急激に高まり、さまざまなナショナリズム運動が展開されるようになる。その1つとして、人々の心を鼓舞するため、1899年に新聞関係者たちが自国の民族的歴史劇の上演を計画した。

歴史劇は「前奏曲」(Preludio)と6つの「情景」(Tableau)から構成され、ヴァイナモイネンが登場する神話の時代から19世紀に至るまでのフィンランドの歴史をたどるものであった。劇のテキストは民族ロマン主義の旗手、エイノ・レイノとヤルマリ・フィンネが担当し、若きジャン・シベリウス(1865-1957)が音楽を作曲している。歴史劇のフィナーレを力強く飾ったのは「フィンランドの目覚め」と題する6つめの「情景」であったが、後にシベリウスはそれを改訂し、1900年に独立した交響詩として世に送った。それが《フィンランディア》作品26である。

こうした作曲の経緯からも明らかなように、《フィンランディア》にはシベリウスの並々ならぬ愛国心がみなぎっている。作品は激しい感情の噴出と穏やかな叙情性を合わせ持っているが、ドラマティックな表現を通して描かれる勝利への希望は、圧政下におけるフィンランド人の魂を強く捉えたに違いない。ロシアの検閲を逃れるため、《フィンランディア》はスカンジナビア以外では「祖国」や「即興曲」という名称で演奏される例もあった。しかしながら、やがてこの交響詩はシベリウスの代表作として、「フィンランディア」という名称と共に世界中の聴衆から愛されるようになる。

交響詩《フィンランディア》への改訂にあたり、シベリウスはオリジナル版のデュナーミクとテンポ記号にわずかな変更を行ったほか、楽曲のコーダを大幅に修正している。すなわち「フィンランドの目覚め」のコーダにおいては、中間部のいわゆる「フィンランディア賛歌」の旋律が全く登場しないのに対し、現行版では最後に賛歌の冒頭部分が朗々と奏でられるのである。これは、美しい賛歌が聴衆に与える象徴的効果を、シベリウスが認識したからに他ならない。後に賛歌の部分は合唱曲に編曲され、

フィンランドの第2の国歌として広く愛唱されるようになったことは周知の通りである。

なお、シベリウスはコーダにおいて「フィンランディア賛歌」の長大な旋律全体を金管楽器で奏する新たな版の作成も行ったが、その効果はあまり芳しくなかった。結局、交響詩としての出版にあたり、コーダで再登場する賛歌の旋律が大幅にカットされ、その冒頭部のみを奏でる現行版へと帰結する。こうした一連の改訂によって、《フィンランディア》の持つ祝祭的な象徴性はよりいっそう高まったといえるであろう。

作曲年代：1899～1900年

初演：1900年7月2日

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ1、ティンパニ1、大太鼓、シンバル、トライアングル、弦楽

(神部 智)

ベートーヴェン Beethoven

## ヴァイオリン協奏曲 二長調 作品61

ヴァイオリン協奏曲のなかで、もっとも広く親しまれているものの1つがベートーヴェン(1770-1827)のこの協奏曲だろう。アン・デア・ウィーン劇場の音楽監督でヴァイオリニストのフランツ・クレメントのために作曲された。2人は歌劇《フィデリオ》の上演で知り合い、この曲を書いたといわれている。初演の1か月前からスケッチをはじめ、一気に書き上げた。興に乗ったベートーヴェンを示すのは「ウィーン劇場の首席ヴァイオリニストで、宮廷音楽監督であるクレメントのためにお情け(クレメンツァ)をもって、1806年、L. v. ベートーヴェン作曲す」とユーモラスに書かれていることから伺える。

初演はクレメントを主演とするコンサートだったらしく、協奏曲の第1楽章と第2楽章のあいだにクレメントの自作を挟み、最後にクレメントの《幻想曲》が演奏された。クレメントの《幻想曲》が技巧的な華やかさがあつたのか、評判はクレメントの作品に集中し、ベートーヴェンの協奏曲はほとんど省みられなかった。

曲は3つの楽章からなり、中期のベートーヴェンを特徴とする田園的・牧歌的な気分を持っている。決して技巧的な作品でなく、曲の性格から「ヴァイオリン独奏をもつ交響曲」とも呼ばれることもある。

**第1楽章** アレグロ・マ・ノン・トロポ協奏曲風ソナタ形式。ティンパニの静かな刻みにつづき、木管が伸びやかな第1主題を歌う。第2主題も木管に現れる。その後、ヴァイオリンがアインガング(指ならし)風に入り、主題を奏でていく。

**第2楽章** ラルゲット 変奏形式。弱音付きの弦楽器が安らかに主題を提示し、ヴァイオリンが装飾的に変奏していく。休みなくアレグロ楽章へと入る。

**第3楽章** アレグロ ロンド形式。ヴァイオリンの力強い主題ではじまり、ソロと管弦楽の対話を交わすように進んでいく。喜びの表情で華麗に曲を結ぶ。

作曲年代：1806年

初演：1806年12月23日、アン・デア・ウィーン劇場、フランツ・クレメントのピアノにより行われた

楽器編成：フルート1、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ1、弦楽、ヴァイオリン・ソロ

(三橋圭介)

シベリウス Sibelius

## 交響曲第1番 ホ短調 作品39

1898年3月、シベリウスはベルリンでベルリオーズの《幻想交響曲》(1830)を聴き、非常に大きな衝撃と感銘を受けた。その余韻も冷めやらぬ翌月、彼は初めての番号付の交響曲、《交響曲第1番》のスケッチを始めている。民族叙事詩『カレヴァラ』に基づきつつ、《クレルヴォ》(1892)や《レンミンケイネン組曲》(1895他)等で標題音楽の可能性を追究してきたシベリウスにとって、標題を持たない「純粋な」交響曲の創作は新たな挑戦であったに違いない。《交響曲第1番》は1899年初頭に完成し、作曲者自身の指揮、ヘルシンキ・フィルハーモニー協会によって初演された。交響曲は大好評であったが、翌年3月、シベリウスはオーケストレーションに修正を加えている。なお、改訂版の指揮は作曲家のロベルト・カヤヌスが行った。

シベリウスの《交響曲第1番》におけるベルリオーズからの影響は、スケッチ帳に残された「Berlioz?」という書き込みや、フィナーレに付された「Quasi una Fantasia」(幻想曲風に)の表記からも明らかであろう。しかしながら、《幻想交響曲》がシベリウスを魅了したのは決してその標題性においてではない。それは、ベルリオーズの作品が精緻な構成

と幻想的表現とを見事に融合させていたからに他ならない。《交響曲第1番》は古典的な4楽章制を有しているが、堅固な筆致の内に垣間みえるラブソディックな表現や幻想性には、すでに円熟したシベリウスの個性を充分にうかがうことができるのである。

一方、和声的要素やオーケストレーションには、ドイツ・ロマン派やロシア国民楽派、特にボロディンとチャイコフスキーからの影響が認められる。《交響曲第1番》の根底に流れる激しいパトスと寂寞とした感情の交差は《交響曲第6番「悲愴」》(1893)からの影響であろうか。また、楽曲の開始を告げるクラリネット・ソロがフィナーレ冒頭で力強く再現する様は、チャイコフスキーの《交響曲第5番》を想起させる。

こうしたさまざまな影響にもかかわらず《交響曲第1番》がきわめて「シベリウスの」な理由は、ベルリオーズやチャイコフスキーの作品と異なり、交響曲が自伝的ではなく叙事的性格を有しているからであろう。個を超越した叙事的要素への志向は、『カレヴァラ』に基づくシベリウスのこれまでの大規模な標題音楽に通底する特徴でもあった。しかし標題をいっさい持たない《交響曲第1

番》は、その表現の抽象性とあいまって、以前の作品にも増して高い普遍性を獲得している。その意味において、この交響曲は初期から中期への結節点となる作品であるといえよう。

**第1楽章**は静かな序奏部（アンダンテ・マ・ノン・トロポ）と情熱的な主部（アレグロ・エネルジコ）で構成される。序奏部で奏されるクラリネットの旋律には主部の楽想の萌芽が含まれており、楽曲は幻想的ながらも緻密に展開して行く。

緩やかな**第2楽章**（アンダンテ）では、牧歌的な雰囲気が続いて激しい感情の高まりを見せる。

**第3楽章**（アレグロ）はブルックナー的なスケルツォ。

**第4楽章**（クワジ・ウナ・ファンタジア）では、まず序奏部で第1楽章冒頭の旋律が回帰した後、激しい動きを見せる楽想と叙情的な旋律が交互に現れる。やがて楽曲はクライマックスに向けて大きなうねりを形づくり、悲劇的な結末を迎える。

**作曲年代**：1898～1900年

**初演**：1899年4月26日。改訂版の初演は1900年7月1日

**楽器編成**：フルート2（ピッコロ1）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、大太鼓、シンバル、トライアングル、ハープ1、弦楽

（神部 智）

## ラヴェル Ravel スペイン狂詩曲

《スペイン狂詩曲》が作曲された1907年は、ラヴェル(1875-1937)がスペインを題材とした作品に多く関わっていた年である。彼のスペインへの共感には母親がバスク地方の出身であることに由来するといわれるが、当時のフランスではスペインが一種の流行であったことも忘れてはならない。特にこの作品の3曲目でも使われているハバネラのリズムは、フランスの作曲家に人気があった。

この作品はラヴェルの最初の大規模な管弦楽曲でもあり、楽器のさまざまな組み合わせによる音色の精妙な変化と、洗練された響きが追求されている。全体は次の4曲からなる。

**1. 夜への前奏曲：**ごく中庸を得た速さで イ長調 3/4拍子。弱音器の使用や弦楽器の分割などにより、抑制された音量の中に多彩な音色が込められ、密やかな夜の香気を醸し出す。第3曲「ハバネラ」を除いて曲全体を貫くヘーホーニー嬰ハの4音モチーフが、冒頭から反復される。

**2. マラゲーニャ：**十分活発に イ長調 3/4拍子。4音モチーフの変形がトランペットで奏される。イングリッシュ・ホルンの独奏で活発なリズムが中断され、前

奏曲の雰囲気呼び戻される。

**3. ハバネラ：**十分に悠然と 緩慢なリズムで 嬰ハ短調ー長調 2/4拍子。3連符と付点リズムによる2種類のハバネラのリズムがさまざまな楽器で組み合わせられ、後半は長調へ移行する。

**4. 祭り：**十分活気をもって ハ長調 6/8拍子 3部形式。5つの民謡風のモチーフが打楽器による小気味よい響きと共に生き生きと提示される。中間部で緩やかになるが、4音モチーフが回帰した後、再び活気が蘇り、冒頭の諸モチーフも再現される。

**作曲年代：**1907年～08年2月(「ハバネラ」の2台ピアノのための原曲は1895年作)

**初演：**1908年3月15日パリ、シャトレ座。

**楽器編成：**ピッコロ1、フルート2(ピッコロ2)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン1、クラリネット2、バス・クラリネット1、ファゴット3、コントラファゴット1、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、トライアングル、大太鼓、小太鼓、タンブリン、シンバル、カ斯塔ネット、タムタム、シロフォン、チェレスタ1、ハープ2、弦楽

(関野さとみ)

モーツァルト Mozart

## ピアノ協奏曲 第20番 二短調 K.466

モーツァルト(1756-91)がこの曲を書いてから本日の演奏会まで220年余りの年月が流れたことになるが、その時間的距離のほぼ中間点にあたる1891年に、『モーツァルトのピアノ協奏曲の復興について』という本が出版された。著者はカール・ライネッケ。ライプツィヒ音楽院長、ゲヴァントハウス管弦楽団指揮者などを務める一方、モーツァルト(旧)全集のピアノ協奏曲の楽譜を校訂した人物である。彼はモーツァルトのピアノ付き合奏曲、とくに協奏曲の演奏回数が少ないことを嘆き、まれに演奏されるのはほとんどが《二短調》だと述べる。そしてモーツァルトのピアノ協奏曲のうち《二短調》のほか少なくとも6曲は、《二短調》と同等かそれを凌ぐ作品だ、という。実際19世紀において、モーツァルトのピアノ協奏曲はかなり偏って演奏され、《二短調》の演奏回数は、モーツァルトのピアノ協奏曲のなかで突出していた。ただそのことは、別の視点からみれば、本日演奏される《二短調》が、モーツァルトの創作の全貌が知られていない時代にあっても演奏され、愛好されてきた、ということの意味している。モーツァルトのこのジャンル中の最もよく知られてきた作品、古典(クラシック)中の古典

(クラシック)である。

この曲が音楽史のロマン派の時代に愛され続けたことには、モーツァルトのピアノ協奏曲としては例外的に短調の曲であることも関係があっただろう。**第1楽章**(アレグロ 4/4拍子)は、そのほの暗い響きのなかに孤独なピアニストが描き出される点で、19世紀に名声を勝ち得たいくつかのピアノ協奏曲と共通している。**第2楽章**(ロマンス 変ロ長調 2/2拍子)は、中間部分にト短調の激しい表現を含む劇的な楽章。これに続く**終楽章**(2/2拍子)では、再び二短調でピアノとオーケストラの生き生きとしたやりとりが展開された後、二長調に「陽転」して楽曲を華やかに締めくくる。こうして最後の最後に二短調から二長調へ移行して1つの「音楽的ドラマ」が生み出されることも、この曲が人々を長らく惹きつけてきた理由の1つであろう。

**作曲年代**：1785年2月10日ウィーンで完成

**初演**：1785年2月11日ウィーン

**楽器編成**：フルート1、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ1、弦楽、ピアノ・ソロ

(小岩信治)

## シマノフスキ Szymanowski 交響曲第4番(協奏交響曲) 作品60

ポーランド(現ウクライナ領のティモショフカ)に生まれたカロル・シマノフスキ(1882-1937)は、1901年にワルシャワ音楽院に入学し、S.ノスコフスキに作曲を師事した。初期の作風は後期ロマン派のブルックナーやマーラー、レーガー、そして特にR.シュトラウスの影響を強く受け、後に《交響曲第2番》(1909~10)のようにスクリャービンの劇的で、ポリフォニックな作風へと発展していく。第1次世界大戦以降は東方的な装飾技法と共に、当時の無調性や多調性、半音階主義、微分音など前衛的な技法を駆使し、声を伴う《交響曲第3番「夜の歌」》(1914~16)や《ヴァイオリン協奏曲》(1916)を作曲する。一般にこの時期がシマノフスキの創作の最盛期と考えられている。というのも1921年以降、彼は時流の新しいさを追い求めるのを止め、それらに代わり、仕事を設けたポーランド南部のタトラ地域の民俗的な歌や舞曲を見出した。しかしこれは保守化への転向ではない。中期までに蓄積した語法の上で、ポーランド人としての自覚と主体性の確立を目指す、真の新しい発見となった。

シマノフスキ最晩年の1932年作曲のこの《交響曲第4番(協奏交響曲)》は、

そうした彼の創作の最後を飾る傑作といえる。ただ、シマノフスキは民謡を自らの作品と結び付けられることを否定している。確かに土俗的なナショナリズムとは無縁であり、既成の民謡やリズムではなく、その本質的な要素を抽出・様式化し、普遍的なポーランドとして作品に統合している。

曲は1932年6月9日に「交響曲の総譜の最後の1音符を書き終えました」という手紙から、作曲を終えた日付が明らかになっている。この時点で「交響曲」と呼んでいるが、この曲に関する最初の手紙では「ピアノ協奏曲を書いている」(3月9日)となっており、4月3日の手紙では「協奏曲を交響曲に変更するかもしれない」と書いている。最終的に仕上がった交響曲「協奏曲風」は、本来、ピアノ・ソロ部分にオーケストラを重ねることで協奏的交響曲としかいいようのない独自のスタイルを作っている。なお、曲は「若きポーランド」の友人であるピアニスト、アルトゥール・ルビンシュタインに捧げられている。以下の3つの楽章からなる。

**第1楽章** アレグロ・モデラート ほぼソナタ形式を踏襲した楽章。シンコ

ペーションによる鼓動のリズムの上でピアノが透明で陽気な節の第1主題を歌う。第2主題は半音階的な弦のパスセージに乗ってフルートが抒情的に歌う。

**第2楽章** レント・ソステヌート 3部形式。弦のゆらぎとピアノのオスティナートに乗ってフルートが歌い、弦楽器のソロが重なっていく。音を積み重ね、次第に熱気を帯び、最後に第1楽章の第1主題を回想し、休みなしにフィナーレに入る。

**第3楽章** アレグロ・アジタート ロンド形式。祭典風のリズミカルな楽想がフィナーレにふさわしく、マズルカ風のゆっくりした部分を挟み、最後は打楽器を多用してお祭り騒ぎのように終結へと導いていく。

**作曲年代**：1932年6月9日

**初演**：1932年、ボズナニ

**楽器編成**：フルート2(ピッコロ1)、オーボエ2(イングリッシュ・ホルン1)、クラリネット2(E♭クラリネット1)、ファゴット2(コントラファゴット1)、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ、トライアングル、小太鼓、大太鼓、シンバル、タムタム、ハープ1、弦楽、ピアノ・ソロ

(三橋圭介)

## ラヴェル Ravel

# バレエ音楽《ラ・ヴァルス》

ウィнна・ワルツの隆盛と共に、19世紀を通してワルツは多くの作曲家たちに愛好された。ラヴェルもその1人であり、彼は1906年頃からヨハン・シュトラウスを讃えるための交響詩《ウィーン》を構想していたが、第1次世界大戦の勃発により作曲を中断する。1917年、ディアギレフからロシア・バレエ団のための新しい作品の依頼を受けたことで交響詩を舞踏詩に変更し、ようやく作品を完成させるが、ディアギレフは舞踏に向かないとしてこの曲を受け取らなかった。

ラヴェルは楽譜の冒頭に、曲のイメージを次のように書いている。「渦を巻く厚い雲の切れ目から、ワルツを踊る何組かが垣間見える。雲は次第に晴れていき、旋回する群集で一杯の大広間が見えてくる。場面は徐々に明るくなる。シャンデリアの輝きが *ff* で炸裂する。1855年頃、皇帝の宮廷」。1855年のウィーンは皇帝フランツ・ヨーゼフの時代である。古き良き時代の象徴である優雅なワルツは、不穏な低音の響きの中から浮かび上がる。大戦による旧世界の価値観の崩壊や終末感を示唆するように、曲の末尾でワルツの3拍子は破壊され、衝撃的な二音で曲は閉じられる。低弦による、不安を象徴するよううねる音

形で序奏が始まり、主題とその派生形が次々に現れてクレッシェンドで *ff* に達する第1部分、低弦のうねりが回帰し、主題が再現・展開される第2部分、そして低弦の半音階の下行音形が、高音域の *fff* に昇りつめる第3部分が続く。

**作曲年代：**1919年～20年

**初演：**演奏会初演は1920年12月12日パリ、ラムルー管弦楽団の演奏会。バレエ初演は1929年5月23日パリ、オペラ座、イダ・ルビンシュタイン夫人の舞踊団による

**楽器編成：**フルート3(ピッコロ1)、オーボエ3(イングリッシュ・ホルン1)、クラリネット2、バス・クラリネット1、ファゴット2、コントラファゴット1、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ1、ティンパニ1、トライアングル、大太鼓、小太鼓、タンブリン、シンバル、カスタネット、タムタム、ベル、アンティーク・シンバル、ハープ2、弦楽

(関野さとみ)